

せめて穏やかな終末を

おなら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

たった一人生き残ってしまった青年に、戦いに消費される少女達に、力不足に震える戦士達に、

あらゆる不幸を過去にする、問答無用のハッピーエンドを。
だから神様、私に力をください。

え、無理？ なら

3. 2. 1.

--	--	--

13 5 1

目次

それは奇怪な妖精だった。

通常、レプラカーンは他者に観測されて初めて存在を許される。それまでは朝露のようなもので、誰に知られることもなく消えてしまう妖精も少なくない。

その妖精はまるで普通の人間のように存在し、容姿も野生の妖精ではありえない10代半場程であった。しかし確かにレプラカーンとしての性質を備えていた。

その妖精は、端的に言っておりえなかつた。

彼女らの存在意義ともいえる聖剣^{カリヨン}への適合性は、数少ない妖精達の中から更に一握りの素質ある者。それらが調整を経て、ようやく使用可能になる兵器である。

その妖精は生まれながらに聖剣を振るっていた。

その妖精の持っていた聖剣は、この世界の歴史を否定した。

聖剣^{カリヨン}とは人類が生み出した叡智の結晶といえる。だが例の聖剣は大賢者にすら解析不能。それでいてある点において他の聖剣^{カリヨン}どころかあらゆる兵器を圧倒した。

総合して、それは完全に人の理解を越えていたので、臭いものには蓋ということ、通常のレプラカーンと同じように扱うということにした。

以上のことを知るのには、当事者であつた医者や研究員。記録として一応は目に通した真面目な軍人ぐらいであろう。

これは一応トップシークレットなので、名義上では管理者であるナイグラートですらないことである。

彼女が知るその妖精は、空を眺めていることの多い少し不思議な少女で、それでも頼れる年長さんだつた。

「ねえ、ノーマ。少し頼まれてくれないかしら」

金砂のような髪を揺らし、ノーマと呼ばれた少女はナイグラートへと向き直つた。

一瞬だけ翠の瞳を泳がせ、小さな口を緩ませ言つた。

「まず内容が知りたいな」

最もと言えば最もだ。これが体育会系の後輩先輩なら許されざるだが、幸いなことに彼女らは違つた。

「ええ、そうね。先走つちやつたみたい。

今日は軍から新しい管理者が来るみたいなのだけれど、もうこんな時間じゃない？」
空は満天の星空模様。平地ならば問題はないだろうが、周囲を深い森にぐるりと覆われているこの倉庫に辿り着くのは初心者には難しい。

「だから様子を見に行つて欲しいのよ、おねがひい」

手と手を合わせて頂きます……ではなく。拝み倒すように言われてしまった。

そういうことなら仕方がないと、ノーマと呼ばれた少女は快く引き受けた。

さて行こうかと玄関に足を向け、——思い出したように少女は振り返った。

「そういえば、クトリはどうしてる？」

「クトリなら、いつも通り年少組の相手をしてると思うわ」

それがどうしたの？と、なんでもないように。実際に彼女にとつては何でもないこと

なので、特に気負うことなく答えた。

「なら良い」

背を向けていたので表情まではナイグラートには分からなかったが、特に気になる様子は見られなかった。

だからまあ、何の気なしに聞いたのだろう。

青髪の少女の名を聞いて、迎えをクトリに頼む選択肢もあつたなど考え、いや頼むなら最年長のノーマが適切だろうと考え直した。

遂にこの日が来てしまった、というのが正直な感想である。

ノーマはもはや漆黒といつても良い森の中を歩きながら考えた。

この世界に救いをもたらさんと奮い立って、十分な力を貰ったにも関わらずこの体たらく。軍から出撃命令が来ないとか、この体が脆すぎるとか、色々思いつくが所詮は全て言い訳でしか無い。

この地で怠惰に過ごしているうちに、一体何人の命が失われ、不幸が起こったのだろう。

でも、ああ。それも今日でお終いだ。エムネットホワイト最後の生き残りにして主人公 ヴイレム・クメシユ。彼がようやく来るのだ。

どうしても会えなかった大賢者と違い、彼ならばもう目と鼻の先にいる。きっと正しい力の振るい方を教えてくれる筈。

盗み聞きして先回りでもしたのか、いつの間にか原作通りずぶ濡れになっていた。パニバルと彼に声を掛けた。

「こんばんは。そしてようこそ我らが妖精倉庫へ」

2.

もしも彼がもう少しだけ妖精の真実に近づくのが早ければ、果たして事態は好転していたのだろうか？

「ヴィレム・クメシユ呪器技官」

呪器技官と、呼ばれ慣れない言葉を付けるのは彼女くらいだ。

「おー、なんだノーマか。どした？」

背中から話しかけられたので振り返る、という至極当然の動作を行い向き直った。

小柄（といつても子供の多いこの場所では十分大きい。あくまで大人に比べてだ）な少女が何か難しそうな顔をして立っていた。

金の髪は脱色したような不自然な色合いだが、他の子に比べればまだ自然。こだわりなのか、今日も一房だけつむじから跳ねていた。

「今は暇ですよね？」

「あー、今はちよつと立て込んでいたような」

ぴよこぴよここと跳ねるいわゆるアホ毛に気を取られながら答えた。

「いえ今日はまだ何も頼まれていない筈。そも名ばかりの呪器技官殿に職務など無いはずですからね」

「う、いやー、なんだ。そんなこともないぞ」

この子は痛いところを突く。皮肉げな物言いは見た目不相応に大人びていて、最年長だということにも納得だ。

「……何度言っても同じだ。戦い方なんて教えられない」

だから正々堂々。彼女のお願いを否定した。

彼女は「でしようね」と相槌を打ち、

「今日は気が変わる物を見せてあげようと思ってね」

そう言つて、ポケットから鍵束をガチャリと取り出した。

「見せたいもの？」

彼女に先導される道すがら、あまり良いものでは無いのだろうと思いつつ聞いた。

「私達が兵器だつてのは聞いてるよね？」

「……………ああ」

いきなりの確信。とはいえ、未だに信じがたいのは事実だ。

この数日、彼女たちと過ごして抱いたイメージは、ただの天真爛漫な子供たちだ。目の前の大人びた子供も、正直平常の外に出るものでもない。

「秘密というには半分だけだけど、気が変わるぐらいのものならここにあるよ」

そうして足を止めた。この建物にはえらく不釣り合いな、金属製の、重圧な扉だ。

5つもある鍵を全て開け、少女は力を込めて、……込めて、

「開けて」

ふてくされたように、ヴェレムに懇願した。

金属の、重圧な扉だ。少女では開けることすら困難なのは仕方がない。気軽に開閉できるのは、男であるヴェレムか、怪力のナイグラートくらいだろう。

つまり、この扉の向こう側は、この少女が一人で立ち入ることが想定されていない領域なのではないだろうか。

そして仮にもここは軍施設である。勝手な行動をすればどうなるか。

「よし、開いたぞ」

だからこそ、その先には致命的な秘密があるのだと理解し、躊躇うことなく侵入した。ヴェレムは小さなランプの光を頼りに、暗闇に目を細める。そこにあつたのは、

「——ははっ」

小さく笑ったヴェレムを、ノーマは冷めた目で眺めていた。

彼女にとっては既知の反応であり、特別感慨深いものではなかったのかも知れない。

「結論から述べると、私達はこの武器を扱えるから兵器として扱われる」
前置きもなく言った。

「私達はレプラカーン。人間の代わりに務めることができる唯一の種族」

「戦うために生み出され、予定通り散っていく1つの弾丸」

「そして、獣達と戦う現代の勇者よ」

彼が真実を反芻し、消化し終えるのを待ち続ける。

鍵の管理は嚴重ではなかったけれど、そろそろナイグラートが気づくかもしれない。

「1つ、聞きたい」

絞り出したような小さな声だ。

「今この時も、誰かが戦ってるのか？」

「貴方が会っていない妖精が2人いる。彼女たちは地上へ行っている筈だから、戦っているでしょうね」

「そうか」

彼の周りは、それなりに平穏だった。

準勇者として戦い続けていた地上と違い、蘇ってからは灰色の景色でありながら、あ
るのちよつとした小競り合いだけ。

だからだろうか、いつしか勘違いしていた。

“この平穩は無条件で在り続ける”

そんな訳がないのだ。仮にも準勇者であつた自分が、なんと勘違いをしていたのだろうか。

ありえない。なんてありえない。

なのに、

——握りしめた拳は、数秒も保たずに力尽きた。

「——分かつた。全面的に協力する」

決意を込めて——本当は自分が戦いだらうに——彼は裏方に徹すると宣言した。

「ありがとう。よろしくお願ひしますね、先輩」朗らかな笑顔で笑い、手を差し伸べた。次に焦つた様子で付け加えた。「じゃあナイグラートにバレない内に消えましょう」

彼女たちが兵器なら、責任を追求されるのは果たして誰なのだろう。

素早く握手を済ませ、努めて軽く言った。

「やっぱり勝手に持つてきたのかよ。食べられんぞ」

「私は美味しくないから……」

「あら、そうでもないと思うわよ?」

「……」

扉の向こうに鬼が居た。

「事情はおおよそ理解できたけどな」

話し手をノーマからナイグラートへ変え、部屋も薄暗い倉庫から彼女の自室へ変更。より詳しい話を聞いた。

「まあ、態度は変えないつもりだぞ」

「そう、良かった」

ナイグラートは心の底から安堵し、次いで押さえ込んでいた疑問が口から漏れた。

「あの子はどうしてあんなことを……」

あの子とは言うまでもなくノーマのことだ。わざわざ妖精たちの秘密を晒した理由が理解できなかった。

勿論、動機を聞いたヴィレムには理解できていたから、ぼかしながら擁護した。

「焦ってたんだろ。エムネトホワイトが来たからカリヨン……、ダグウエポンについて教

えてほしかったのさ」

「そういうえば、どうして戦いへの教えを請いたのだろうか。エムネトワイトならば全員が戦えると勘違いしていたのかもしれない。」

「そのあたりは今となつてはどうでも良いかと、ヴィレムは無駄な考えを閉め切つた。」

「そう、彼女が……。最年長だから、色々と思う所があるのかしらね」

「最年長つて、何歳ぐら、いや失言だつた忘れてくれ」

「あら、良い心がけね。」

でも私も知らないのよ。ここに来た時にはもう居たから」

「私よりも年上かも」と続けて言われた冗談は曖昧に笑つて誤魔化した。君子危うきに近寄らずである。

紅茶を一息で飲み干した。

さて、そろそろ彼女の「罰」が終わるころだろう。約束を守るため席を立つた。

「そういうえば、」

一番重要であろうことを聞き忘れていた。

本人に聞くべきかもしれないが、物によつては準備が変わつてしまう。

「ノーマはどのダグウエポンを使うんだ？」

「彼女の名前はノーマ・エル・エクスカリバー。だから適合したのは、ダグウエポン遺跡兵装エクスカ

リバーね」

聞いたことの無い聖劍カリヨンだった。

3.

今この場には5人居るが、内4人がダグウェポンに選ばれた者である。

クトリ、アイセア、ネフレン。そしてヴィレム。

仲間はずれの私、ノーマ・エル・エクスカリバーはしかして当然のようにここに居て、
そして受け入れられている。

「えー、これから訓練を始めるわけだが」

やや緊張しているように見えるヴィレム。

慣れていないのと、相手が（見た目）か弱い私達だからの戸惑いか。

「その前に、お前らのダグウェポンを見せて欲しい」

3人の武器を知らない訳ではあるまい。

視線は私達4人に平等に注がれているが、間違ひなく私へと向けられた言葉である。

「うーん、イマイチ納得できてないけど」

どこか釈然としない様子でクトリがセニオリスを構えた。

クトリと私が端に立っているの、仲間はずれがばれるのは最後になるだろう。

それまでは空でも眺めてみようか。

好きなのだ。雲を眺めているのが。

「インサニアは『使い手の恐怖心を後回しにする』タレントがある。

格こそ高くないが、どんな相手とも戦える優れたダグウェポンだな」

まあ、強すぎる相手に挑めるのも問題があるが。と付け足して彼は締めくくった。

「ほーう、流石はエムネットワイト。私達よりもよっぽど詳しいっすねえ」

アイセアが小声で言った。

確かに、それが本当なら凄まじい革新だろうとクトリは自らの剣をじっと睨みつけた。

セニオリスは死を刻むという。どんなに巨大なタイムレであろうと、大きな力も込めずに殺せるのなら、継戦能力が飛躍的に上昇する。

“正しい”戦い方とやらを彼が教えてくれるというのだから、至れり尽くせり過ぎて

泣きそうになつてくる。

「気に食わないっすか？」

……アイセアはいつも、こちらの心を見透かしてくる。

「まあ、ね」

それ以上は言葉が出なかつた。言つてしまえば、次から次へと言葉が溢れてきそうで、とても口にできない。

アイセアはそれすら察したのか、「そつすか」といつもの軽い調子で会話を打ち切つた。

「で、次はノーマなんだが」

彼が困つた様子で口にした。

それもそのはず、彼女は手ぶらだったのだから。

ノーマは私がここに来た時にはもう居たが、戦場で肩を並べたことはなかつた。

それでも彼女の武器は一度だけ見たことがある。

「分かつてる。今見せるよ」

ノーマの剣は特殊だ。まず私達のようにわざわざ持ち歩く必要がない。

今のように虚空に手を伸ばし、どこからともなく呼び出せる。

「――」

彼が息を吞んで、目を見開いた。その現象も驚きだが、最も身を引くのが剣そのものである。

それは私達のダグウェポンとは一線を画する剣だった。

刀身には一切の繋ぎ目はなく、銀の刀身は磨き抜かれた鉄を思わせる。

サイズは通常の長剣程度で、一見して普通の武器のように見えてしまう。

だが、それが普通などとは誰も思わないだろう。

まるで昔話にある、ドラゴンを打ち破った勇者の武器。

万人がイメージする聖剣そのものの姿である。

「この剣が私の武器。エクスカリバー」

だが彼女の言い方は、まるでイタズラを咎められたようだ。

「この剣が私の武器。エクスカリバー」

聞いたことのない聖剣^{カリオン}だった。

だから自分が倒れた後に生み出されたか、はたまた歴史とともに埋まっていたのを文字通り引つ張ってきたものかとヴィレムは考えていた。

だが、一目見れば分かる。これは聖剣カリヨンではない。

聖剣はタリスマンを呪力線により複雑怪奇に束ねた武器である。

その性質上目に見える繋ぎ目があるはずだし、多くのタリスマンを束ねる以上巨大な
なりがちだ。

そのどちらの特徴も示さないそれは聖剣カリヨンではない。当然の結論だった。

だが普通の剣とはどうにも思えないのも事実である。

おそらく、これ事態が1つのタリスマンなのではないだろうか。

剣の形に加工し、戦闘に耐えうるタレントを保持させる技術を、自身が倒れてから人
類の滅亡までの期間で生み出せたとも思えないので、セニオリスよりも遥かに古い。

聖剣カリヨンという概念が生み出されるよりも前の武器なのだろう。

「あー、すまんがその剣のことは知らん。逆に俺が教えて欲しいぐらいだ」

「ほー、技官殿にも知らない剣があつたすねえ。

ま、あたしも良く知らないんで、詳しく教えてくれるとありがたいっす」

ネフレンが同意するように頷いた。

その所作はあまりにも控えめだったので、ノーマには届かなかつたようだが。

「この聖剣のタレントは、巨大な斬撃、とかビームかな？」

イマイチ要領を得ない発言だが、広範囲を攻撃するタレントのようだ。

ヴィレムは納得したが、アイセアはまだ満足していないようだ。

「うーん、でもそれだけじゃあ、説明できない現象があるんすよね」

アイセアは貼り付けたような笑顔のまま、人差し指をノーマへと向けた。

「レプラカーンにしてはあまりにも長生きしすぎている。」

そのあたりの秘訣も聞いておきたいっすね」

「ちよ、アイセア?」

見かねたようにクトリが口を挟んだ。

彼女たちのなかで、そのことに触れるのはタブーなのだろうか。

ヴィレムはレプラカーンについての詳細を知らない。

ノーマの年齢を知らない。他の妖精達だって同じだ。

知っているのは、ナイグラートが涙ながらに語った、「彼女たちは20歳の誕生日を迎

えることもできない」という発言だけ。

戦士故の短命とは、どうにも違うようだった。

この辺り、ナイグラートを問い詰める必要がありそうだ。

「確かにビームじゃ長生きはできないね」

ノーマの返答は軽い口調ながら、懺悔をしているようにも見えた。

「私は『不老』だからね。寿命があるかは知らないけど、多分ないと思う。」

だから『不老不死』か」

「一通り紹介は終わったし、そろそろ本題に入ろうよ」

「え、ああ、そうだな」

思ったほどの追及もなく次に進めそうだった。

彼女らはこの世界に疎いし、考えすぎだったかもしれない。

発見された時は検査に次ぐ検査だったらしいが、その時もこの世界の理論に上手いこと押し込められたのだろうか。

私自身はその時ずっと眠っていたので詳細は不明だ。

今度先生に会った時に聞いてみよう。

「戦い方についても実際どうなんだ？ お前らがどれくらい戦えるのか知らんのだが」

彼の疑問は教官として最もらしいと思えたが、クトリには下に見られていると思ったのだろう。険のある言い方で答えた。

「君よりは強いんじゃない?」

「まあまあ……」

このままだと「お前の力を見せてみる」とヴィレムに戦わせるようなシチュエーションになるかもしれない。

「……」

ムツとした顔でこちらを一瞥し、クトリは顔を伏せる。

彼女からの好感度は低いと思う。小さい頃からあまり話さなかったのだ。

彼女がべつたりだった先輩が居たが（というと彼女は怒るかもしれないが）、私はまあ、見捨てたことになるのだろうか。

助けられたとは思えないが、なんとなく話しづらい。彼女に対してはそんな小さな負い目があるのだ。

アイセアやネフレンも、理由は違えどあまり話さない。

だからさつき追及された時は、驚いた。

それはさておき。

「実際に戦っているところ見れば分かるんじゃないかな」

「あー、良いのか?」

とヴィレムが気を使ったのは、クトリに対してだろう。

私が口を開くと、アイセアが代わりに言い放った。

「良いと思うっすよ。」

で、誰と誰が戦うんすか？」

こつちもこつちで随分と棘があるが、対象が違う。彼女の挑戦的な視線は私に向けられていた。

「じゃあ、私とアイセアでやろうか」

私は微笑みながら答えた。

——ならば受けて立とう。彼女には先延ばしにした問題もある。

「んじゃ、胸を借りますよ、先輩」

「ええ、全力で来なよ、後輩」

さて、どちらが本当に先輩なのか。それは分からない。

それでも——

本当の彼女を私は知っているのだろう。